

平成26年の年頭にあって

農林水産政策研究所長 渡部 靖夫

はじめに

平成26年の新春を迎えて、日頃ご支援をいただいている皆さまに、この場を借りて年頭のご挨拶を申し上げます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

昨年4月に所長職を拝命してから、早いもので9カ月が過ぎようとしております。この間、TPP交渉への参加、米生産調整策の見直しなど大きな出来事が次々に起こり、少し大げさに申し上げるなら、これまでの我が国農林水産業を支えてきた戦後レジームが、急激に変貌し始めたのを感じています。私たち一人一人が、国家百年の大計を誤らぬよう、真剣に対処すべき正念場を迎えているのではないのでしょうか。当研究所も、その政策研究機関としての使命を十分に自覚し、課せられた役割を果たしていかなければなりません。その役割について日頃感じていることを、この機会に若干述べさせていただきます。

行政と研究の時間感覚

今から30余年前、行政職として入省した当時、上司には随分しごかれました。とりわけ「拙速は巧遅に勝る」という教訓を、徹底的に叩き込まれたのを覚えています。その心は、「どんな高性能の銃でも、準備に時間をかけすぎて、戦闘に間に合わなくなってしまったのでは、何の役にも立たない。とりあえず一刻でも早く、例えば種子島(?)でも良いから、手近な飛び道具を持って戦場に向かえ。そして一発でも敵にぶっ放してこい!」といった物騒なところでしょうか。生来愚図なものですから、上司には随分と迷惑をかけましたが、この教訓があったおかげで、その後遭遇したいくつかの難局を、何とか乗り切ることができたのではないかと、思っています。

このように、行政の世界では迅速性が優先されるのに比べると、研究は、一般的に、時間について寛容に思われます。例えば、学術論文の査読です。学会誌などに掲載された論文をみると、末尾に必ず当該論文の「受付年月日」と「受理年月日」が記載されていますが、普通、両日付の間には数カ月、時には1年以上経過していることもあります。これは学術論文がレフェリーによる査読を受け、相当長期にわたって修正と再査読を繰り返していることによるものですが、前述したような「切った、張った」に明け暮れる行政マンは、この悠長さは理解に苦しむはずで、研究の世界では、「拙速」こそ、最もやってはいけないことであり、両者の時間感覚にはかなり大きな違いがあると申せましょう。

政策研の役割

もとより政策研は、行政に付置された研究機関ですから、その時々の政策の企画・立案に資する短期・即応的な研究業務に取り組まなければなりません。政策研設立(2001年)に際しても、前身の農業総合研究所(総研)が、行政部局からのニーズに十分応えるような研究体制をとってこなかったことが、重要な反省点の一つでした。このため政策研では、行政部局と連携調整した上で研究課題を設定、1年間、場合によっては(所内にタスクフォースなどによって)もっと短期間で、研究成果を提供するようになりました。おそらく、このような機動性をもつ研究機関は、国内では私たち政策研だけではないかと自負しています。

しかしながら、世の中がカリカリきている時、少し冷静になって、時代や世界の向かう先を、幅広い視野で洞察することも大切になるかもしれません。このため政策研は、取り組むべき研究スキームの一つの柱として「基盤的・先導的な研究」を掲げています。目先の業務に追われがちな行政部局の皆さまに(もちろん一般社会の皆さまにも)、一歩先の政策展開を見据えながら、将来必要になりそうな政策課題について調査・研究し、その成果を示していくようにしているのです。例えば今、「農業のもつ新しい価値」、「農山漁村の維持・再生の方策」、「総合的な食料安全保障のあり方」などといった重要なテーマについて、やや長い調査・研究期間をいただいております(詳しい内容については、当研究所のホームページに掲げている研究課題をクリックしてご覧ください)。

おわりに

私たちの研究所は、多くの大学アカデミズムや民間シンクタンクと異なり、前述したように、長期と短期の両方の視点から、様々な研究成果を行政部局や一般社会にバランス良く発信することが、その大切な役割であり、どちらに偏り過ぎても駄目なのだと思います。皆さまには、そんなことを理解いただきながら、今年一年間、ご指導ご鞭撻をいただければ幸いです。

